



赤水図を原寸から5倍に拡大したタペストリーの上で、各県庁所在地の位置を考える中学生と、解説する卜部勝彦教授(右)＝高萩市高萩

## 高萩・秋山中

# 赤水図、授業で活用

## 今昔比べ県庁所在地探し

高萩市出身で江戸時代の地理学者、長久保赤水(1717～1801年)が作成した日本地図(赤水図)を使った授業が22日、高萩市高萩の市立秋山中学校(小池洋一校長)で開かれた。赤水図と現代の地図と見比べながら、各県庁所在地に相当する場所を探すワークショップで、1年生約40人が参加した。日本大経済学部 卜部勝彦教授が授業を担当した。

卜部教授は、日本地図学会内に今年設置された「長久保赤水図専門部会」で代表を務める。今回の授業は同部会と長久保赤水顕彰会(佐川春久会長)が共催した。今昔を比べることで地図の面白さを子どもたちに知ってもらうとともに、郷土の偉人への理解を深めてもらうのが狙いだ。

生徒たちは7グループごとに手分けして、東北から九州の各地方の県庁所在地を現代の地図帳で確認。1791年に作成された赤水図第2版の原寸の複製図に落とし込むことを試みた。

赤水図に記載されている地名は現代と異なる場所があるため、地名に頼らず、海岸線や河川の形状、山がある位置などを手がかりに県庁所在地の場所を探した。その後、生徒たちは、原寸から5倍に拡大された巨大な赤水図のタペストリーの上で、県庁所在地の位置をそれぞれ確認した。

卜部教授は「思ったより生徒が関心を持ってくれた。(新旧)二つの地図を比較して情報をたぐり寄せていくことを徹底してできたのは良かった」と述べた。生徒の松本莉乙さん(12)は「川の位置で判断して、中国地方の県庁所在地の場所が分かった」、鈴木咲帆さん(13)は「自分が知っている場所でも地名が変わっていたり、『こんな山があったんだ』と発見があったりして面白かった」とそれぞれ話した。

同様の授業は23日に松岡中、9月には高萩中でも行われる。卜部教授は今回の授業について、同部会で議論を深めた上で手法の改善を図り、将来的には全国各地の学校で取り組めるよう展開していきたい考えだ。